

# イデオロギーとしての、あるいは 言説としての〈教育〉をめぐって

—— 19世紀イギリス教育史研究<sup>(52)</sup> ——

上野 耕三郎

## I-4 秩序をめぐって

〈道徳〉ということばに包摂されるものを追うことにしよう。〈事実〉が明らかにならないにもかかわらず、〈道徳〉ということばにあまりに拘泥しすぎている、と思われるかもしれない。もちろんそのことは充分承知の上である。繰り返しになるが、このことは重要な意味をもっている。というのは、歴史は具体的な〈事実〉の集積によってのみ構成されているのではなく、人々が〈事実〉の大海の中からどのような〈事実〉を拾い上げ、それをどのように認識し、意味づけていたか、ということをも含むものだからである。100年以上も前の歴史を理解するためには、具体的な歴史事象を確定しなければならぬのだが（このことは既に述べたように一筋縄ではいかない作業である）、同時代のさまざまな人々が歴史事象に何を読み込んでいたのかを知ることも、それに劣らず必要であり、価値のあることである。もちろんこのことはとても困難な壁におち当たっている。ものを書き残さない庶民が<sup>(53)</sup>、その身のまわりの出来事、さらにはそもそも意識の対象とはなりにくい出来事に対して、どのような感情を抱いていたのかという点については、まだ解きあかしの端緒が開かれたばかりである。ならば、一步退いて、ここでは〈教

(52) 本論文は『人文研究』第83輯所収の拙稿の続編である。

(53) だからといって書きことばと無縁である、ということにはならない。たとえば、ヴィンセントはその著作で、民衆の生活のなかでのリテラシーのありようを詳細に探っている。(David Vincent, *Literacy and Popular Culture: England 1750-1914*, Cambridge University Press, 1989.)

育>あるいは<道德>ということばに込められた意味を、労働者の生活圏への侵入者、探訪者——それは従来の「教育」史の書き手に多くの言説を提供した——のものの言い方のなかからすくい取るという途を選んでも、必ずしも意味がないとはいえないであろう。しかし労働者の日常の生活にまでわけ入り、そこから意味をくみとった真の探訪者がなんと少ないことか。これからも引用する文章の書き手の多くは、社会改革者、視学官などであるが、彼らの生活圏は心理的にも空間的にもほとんど労働者のそれとは交わることのなかったものである。彼らの言説がきわめて型にはまったものとの印象を与えているのもこのためであろう。

前置きがまた長くなった。ともあれ19世紀の初等<教育>を理解するには、一見とても遠回り、無駄とも思える途をたどることもまた必要であろう。<道德>へと立ち戻ることになろう。

\*

\*

男たちが真っ裸で走るレースをし、それを群がって応援する仲間、それを恥ずかしげもなく見物する女性や子どもたちのさまを、ひとりの視学官は眉をひそめ、その報告書に書き記している。

「朝の9時と午後の4時という白昼に、一人は青春の盛り、もう一人は中年過ぎの男たちが、公道で、それも真っ裸で走るレースというか、時間を競う試合をしているのを見たことがある。最初の時は、裸の男がゴールに到着すると、仲間の群衆に大声で祝福され、そして仲間の肩に担ぎあげられ、勝利の凱旋のようにして連れていかれた。もうひとつの場合には、大群衆が裸の男の到着を待っていた。この恥さらしなレースがおこなわれた道路に沿って並ぶ群衆には、あらゆる年齢の女性——母親、工場勤めの少女、幼い子どもたち——がいた。走り手たちはたいへんな関心をあおっていたように見える。しかしそこに集まっていた多くの人々の、興味津々たるどの顔にも、ひとかけらの恥ずかしささえも見ることはできなかった。<sup>(54)</sup>」

いったいぜんたいこれは何なのか、このレースは何のためにおこなわれているのだろうか。これだけからでは事実は何であったかは皆目わからない。そもそも事象に対して距離が離れすぎている者が、得体の知れないものに怯えている、ということなのか。すくなくとも労働者が〈群れる〉あるいは〈集う〉ことへの怯えを、ここに読み込むことはあながち見当違いとは言えないであろう。また視学官の〈女性〉〈子ども〉範疇からは、ここに垣間みられた〈女性〉〈子ども〉は逸脱している、ということを読み取ることもあながち深読みとは言えないであろう。ここにみられる現象を〈群れる〉あるいは〈集う〉という表現で括ることが適切かどうかは問題があるかもしれないが、それあるいはそれが必然的に孕むものへの怯え、怖れはさまざまな事象に意味づけをあたえている。たとえば、「住民たちは獣のような残忍性(animal brutalities)に溺れたままにされているようにみえる。1849年の3月スタフォード巡回裁判では、他の重大な同種の罪と一緒に、真っ昼間に畑で強姦をした罪で4人の若者が裁かれた。なんと百人もの男女そして年齢もさまざまな者が観客として立っていた！<sup>(55)</sup>」というものの言い方にもそのことは見てとれる。

〈群れる〉〈集う〉あるいは〈獣性〉という喩で表現されるものの典型は教区などの祝祭であろう。

「一年に一度あらゆる教区で催され、2、3日の間連続して祭日となる教区の祝祭に、音楽と踊りはつきものである。教区に属する人々はすべてそのときには帰省し、どの家々もお客で一杯になる。もし社交的集まり好きが浪費へと至るならば、それは主として一カ月に一度の賃金支払日の夜である。気分転換をはかり、賃金を分けるために、たくさんの人々がビアハウスに集う。残念なことには、ある程度は祝祭に伴う誘惑の結

(54) *MCCE*, 1846, Vol.1, p.440.

(55) Jelinger C. Symons, *op. cit.*, p.38.

果、多額のお金がこのように浪費される。そしてさまざまな種類の不行跡が結果として起こることになる。たぶんしばしば変わる賃金を確保安定すること、それもできる限りひとりひとりに別々にそうする以外の、どんな規制も有益な結果をもたらさないであろう。<sup>(56)</sup>」

ウィルダースピンは、子どもたちをも巻き込んだ祭りに対抗する術<sup>すべ</sup>=幼児学校を編みだしたことを、自慢げに述べている。

「さらに多くの害悪を生み出すもうひとつのことがある。すなわち、子どもたちを祭りに連れていくことである。私たちの学校が開校した最初の年、ロンドン近くには何らかの祭りがあり、70、80人の子どもたちが欠席することがよくあった。しかし親たちはこの悪癖をほとんど矯正した。というのも、現在では祭りに行くために20人以上の欠席者がでることとはなくなったからである。幾人かの子どもたちが私に言うには、親は子どもたちを祭りに連れていくのを望んでいるが、子どもたちは祭りに行く代わりに学校に行くことを許してくれるように願い出た。……

子どものときからそれに慣れ親しんでしまっている大人に、祭りに行くことをやめるように説くことはたいへん難しいことである。しかし子どもたちはそのような習慣を容易にやめることができる。というのは、子どもたちは学校で楽しく過ごせるならば、祭りに行こうとする気などおこさないからである。<sup>(57)</sup>」

ここでは人々が<群れる>あるいは<集う>——それを<社交性>と言い換えてもよいのだが——典型的機会ともいうべき祝祭が、その観察者そして

(56) *MCCE*, 1840-41, pp.209-211.

(57) Samuel Wilderspin, *On the Importance of Educating*……, pp.190-191, See Samuel Wilderspin, *The Infant System*……, pp.39-40.

書き手の感覚にざらざらとした違和感を与えている。それがいったい参加者の生活のなかでどのように機能していたかを十分に理解することができず、結局のところとまどいと怖れのないまぜろになった感覚が、その文章からうかがえる。だからこの〈社交性〉の領域から子どもたちを隔離しようとするウィルダースピンの意図もわからないではない。

そもそも教区の祭りとはいったい何なのか。主として18世紀以降の民衆娯楽の研究を進めたマルコムスンやベイリーによれば<sup>(58)</sup>、緊密に織り合わされた農村共同体に根づいた、いささか粗野で儀式的な民衆文化には、祝祭がつきものであった。このような社会においては、日々の労働と労働以外の生活との間にはそもそも明確な境界線は敷かれてはおらず、たんたんとして過ぎてゆく日常生活は〈社交性〉によって味付けをされていた。その〈社交性〉の最たるものが共同体の全員が参加する祝祭であった。

そもそもが民衆の娯楽は私的なものではなく、〈集う〉もので、集団的色彩の強いものであった。ほとんどの教区ではそこに住む人々ばかりではなく、親類縁者そして友人たちが客として招かれ、かなりな数の訪問者もまた祭りに参加した。というのはバラバラになった友人や親類縁者が、彼らの絆の強さを再確認するために寄り集まったからである。

〈群れる〉〈集う〉ということのひとつの特徴とする、これらの祝祭はけっして洗練されてはいなかった。すなわち、それは過剰ともいえるエネルギーの放出、血で染まる暴力儀式——牛攻め、穴熊いじめ、闘鶏などの動物虐待やレスリングや拳闘などの余興——を伴っていた。また祝祭の場には屋台が出され、時には旅まわりのバイオリン引きが踊り手のために演奏するなど、プロの芸人がしばしば地域の祝祭に加わり、雰囲気盛り上げるのに手

---

(58) Robert W. Malcolmson, *Popular Recreation in English Society 1700-1850*, Cambridge University Press, 1973, Peter Bailey, *Leisure and Class in Victorian England: Rational recreation and the contest for control, 1830-1885*, Routledge and Kegan Paul, 1978.

を貸していた。

こうして祭りは人々を非日常的世界へと誘い込み、日々の生活体験とはまったくかけ離れた、異質な体験に人々をさらすこととなる。と同時にその体験に日々の生活体験とはまったく異なった新たな意味づけをすることとなった。祝祭は堅固不動と思われている日常の秩序に風穴をあけ、しばしばそれを逆転させ、混沌とした空間をつくりだす。その空間では日常世界を牛耳る規制力そして拘束力は解体されてしまう。このようなことは他の場所、空間であったならばけっして許容されることのない、夢想としてのみ許されるものであった。すなわち、人間の欲望を解き放つ祝祭空間では、日常世界の現実——日々のつらい労働や単調な生活——を一時的に押し退けてしまうことが可能である。そこでは興奮が高まり、倦怠感は脇へと追いやられる。過剰ともいえるエネルギーの解放、血を見るような荒々しいものによる興奮は日常ではけっして味わえない経験である。祝祭は日常をはるかに越えたものであり、あまりにも現実的である責務や苦役からの一時的な解放、はけ口であった。

バフチーンが言うように「カーニバルはただじっと観ているものではない。——**その中で生活をするのである。すべての人が生活するのである。**なぜならそのイデーにおいてカーニバルは**全民衆的**なものだからである。カーニバルの行なわれている間は、誰にとってもカーニバル的生活以外の生活はないのである。カーニバルは空間的境界を知らぬがゆえに、そこを離れてどこに行くこともできない。カーニバルが行なわれている時には、カーニバルの法律、つまりカーニバル的**自由**の法によってのみ生活できるのである。<sup>(59)</sup>」

このような祝祭という非日常的な場では、農村共同体の権威・秩序構造が底抜け騒ぎのなかで一時的に破壊され、たとえば民衆が王となり、逆転された関係をつくりだした。しかしジェントリーをはじめとする支配階級はそれ

---

(59) ミハイル・バフチーン、川端香男里訳『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、1974、14頁。

に攻撃を加えるどころか、それに対して寛容であり、しばしば民衆の祝祭を庇護した。マルコムスンが指摘するように、その寛容さのよってきたところは、ひとつには彼ら自身が農村共同体の構成員であり、また祝祭は民衆の欲求不満を発散させ、そのことによって農村寡頭制支配の権威を強化するのに役立つとの認識によるものであった<sup>(60)</sup>。

だがわれわれが問題とする 19 世紀のこの時代には、支配階級が依然として寛容的態度を示していたのだろうか。確かに都市労働者の娯楽の多くはその精神そして形式で農村的色彩を濃く残しており、依然として祝祭性そして残虐性への熱狂を示していたこともまた事実である。これに対して都市に住まう支配階級が放埒の安定化効果を充分承知して、許容的態度にでていたかはきわめて疑問である<sup>(61)</sup>。

少なくとも社会改革を標榜する文章の書き手の多くは、そのエートスからいっても生粋のジェントリーではなかった。したがって、祝祭、それに伴う放縦の古典的表現——飲めや歌えの大騒ぎ、動物虐待など——をもはや許すことはできなかった。たとえば次のような指摘はそのことを如実に示している。

「質問 804. 人々の娯楽についてですが、それはどのようなものですか？ ——すべて下卑た類のものです。安息日の神聖さを冒とくする件については私たちはたくさん話を聞いております。しかしそれは以前はもっとひどかったのです。……そこ(トッテナム・コートロードの東側)や長い原っぱにはいくつかの大きな池がありました。ここでの娯楽はかも狩り(duck-hunting)、アナグマいじめ(badger-baiting)でした。また猫を水の中に投げ入れ、犬をけしかけるのです。たいへんな虐待が常におこなわれ、最も忌まわしいシーンが演じられておりました。最も低賃金

---

(60) Robert W. Malcolmson, *op. cit.*, ch. 4.

(61) Peter Bailey, *op. cit.*, pp.2-3.

で最も無知な者に限られない、その当時のいかがわしい者たちの残虐行為を信じることは誰にもできないでしょう。<sup>(62)</sup>」

「質問 987. この地区に広まっている害悪は良い道徳・宗教的教育が欠けていることから生じるとお考えですか? ——その問題については明らかにそうだと考えています。……これらの地区ではしばしば牛攻め (bull-baiting) がなされ、鉞夫たちはそれに熱狂しており、その牛攻めを取り締まろうとすると、暴動が起こる始末です。<sup>(63)</sup>」

「同様の初期教育が動物虐待への最善の予防策である。動物虐待は下層階級の間を広まっている悪習であり、小さいときに昆虫いじめやネズミ・猫殺しでもってはじまり、長じては野蛮なスポーツ、拳闘の試合や公開処刑によって増長され、多くの場合には、ついには危険な残虐行為にまでいたるような悪習である。<sup>(64)</sup>」

「しばしばまったく思慮がないことから、動物を虐待することが子どもたちのあいだに蔓延している。その問題についての多くのレッスンによって、そしてその目的のために飼われている犬、猫、うさぎ、あひる等々のペットをかわいがるという実際の習慣を身につけることによって、そして爬虫類に対するものさえも含むすべての残虐行為に対する、教師と子どもたちの仲間による非難叱責を聞くことによって、動物虐待を防ぐことができるであろう。昆虫あるいは爬虫類を殺すこと、あるいは虐待することはけっして許されるべきではない。<sup>(65)</sup>」

こうした血で染まる暴力儀式が、ある社会的コンテクストから切り離され、<教育>言説の内部に組み込まれると、それは子どもたちの育ち、子ども

(62) *Report 1835*, evidence of Francis Place.

(63) *Report 1835* 報告, evidence of John Corrie.

(64) James Simpson, *op. cit.*, p.22.

(65) *Ibid.*, p.99. See *MCCE*, 1840-41, p.168.



たちの幼いときからの習慣形成によるものであり、だからそれは矯正可能でもある、とされる。ところでマルコムスンによれば、庶民に人気のあった血で染まる暴力儀式にたいする反対運動は、19世紀の最初の40年間にその頂点に達し、そのことも力あって、1840年代までにそのほとんどは姿を消した、ということである<sup>(66)</sup>。この過程で噴出した、血で染まる暴力儀式に対する批判・反対論が、道德問題へと収斂していくことから容易にみてとれるように、その多くは道德的そして宗教的考えから沸き上がったものであった。すなわち、そのような気晴らし・娯楽は「野蛮で(barbarous)」、「非人間的(in-human)」、「未開の(uncivilized)」もので、進歩と理性を標榜する時代の啓蒙的精神にそぐわないものとされた<sup>(67)</sup>。言うまでもないが、このような捉えかたの背後には文化の違いともいふべきものが浮かび上がってくる。すなわち「一般庶民の多くは動物との戦いを生活の『自然的』過程の生得的部分としてみなしていた。他方、改革者は自然の秩序内での人の地位についてまったく異なった考えを抱いていた。改革者にとって、人の道德的義務の全般的枠組は生あるものの連鎖の中にあるべきであった。すなわち人は動物の世界を統治する力を生まれながらに授かっている。しかし神が人間の生を導くように、人はその權威を従属する被創造物に乱用してはならない。権利と義務の秩序体系があり、物言わぬ動物に対する人の義務は簡単に無視されるべきではない。<sup>(68)</sup>」

また、啓蒙的精神にそぐわない血で染まる暴力儀式への批判は、それが社会的權威秩序を突き崩す危険性を孕んでいるとの主張からもなされている。なぜならば、それは人を興奮の坩堝に陥れ、たんたんとした日常生活の秩序を攪乱し、怠惰、浪費、そして賭博へと人を誘い、そしてときには騒々しい、

---

(66) Robert W. Malcolmson, *op. cit.*, p.119.

(67) この点に関しては再度立ち戻らなければならないが、労働者階級の生活を描写する文章にはこのような喩がちりばめられている。そしてそのことがこの時代の教育学・教育方法といかなる関連をもっているかは興味ある課題である。

(68) Robert W. Malcolmson, *op. cit.*, p.136.

收拾のつかない混乱を招いたからである<sup>(69)</sup>。まさに市民社会秩序とは対極に位置するものであったからである。

收拾のつかない混乱に一役買っていたと名指しされたのは酒である。

「人と少しうまくいかない場合には、招待するのが習わしである。ビールを樽一杯、強い酒を何本か買い込み、一群の男女を家に形式上は夕食に招く。そして招待された人はそれぞれが余興と酒代を幾らか払う。彼らはしばしば飲めや歌えの酒宴を一晩中あるいは次の日まで繰り広げ、下品な放蕩がなされる。子どもたちや若者が一般にその酒宴の一部に加わり、この習わしの不道德さはぞっとするほどショッキングである。賃金はパブリックハウスで定期的に支払われ、酔いつぶれることへのこの御招待を恥知らずにも許してしまっている。<sup>(70)</sup>」

少なくともここでは「飲めや歌え」の酒宴に含まれる、あるいはそれに伴う三つのことが示唆され、非難・弾劾されている。ひとつは労働者の<群れる>あるいは<集う>習性ともいうべきものである。なぜゆえに彼らが<群れ><集う>かの理由はまったくといってよいほど書き手には理解できないが、それだからこそ逆にそれに対する恐れ、怯えが昂じるのである。二つ目

(69) *Ibid*, p.138. いわずもがなのことかもしれないが、こういう批判攻撃の中に、公然たる階級的偏見がうっかり暴露してしまっている。「熊いじめ、闘犬などの問題を論じながら、人間性を主張する資格もまったくないすべての人によって、また鹿撃ちからさえも下層階級は容赦せずに非難されている。他方、彼ら(批判者たち)がおこなう同様の野蛮なスポーツは、自分たちによって徳とされている。そして無防備な動物に対する乱暴や反逆行為を、勇敢なそして高雅な行為に属するものとして彼らはおおはしゃぎで語る。」(*Animals' Friend*, no.6, 1838, p.16, quoted in Robert W. Malcolmson, *op. cit.*, p.154.) 「残虐行為」の批判者の眼には、富者のファッションナブルな気晴らしと貧者の「残虐」とのあいだには厳然たる差異があると映っていた。

(70) Jelinger C. Symons, *op. cit.*, p.35.

にはその得体の知れないものに、子どもや若者が加わり、そのことによって彼らは「墮落」への途に突き進んでいく、ということである。加えて酒を飲ませるパブで賃金が支払われているという指摘である。このことがまた飲むことへの誘惑を断ち切ることを困難にしている、という。

結局このことはなぜ労働者らはそこに引きつけられ、寄り集まるのかという問題に行きつく。既に述べた祝祭を典型とする〈集い〉とは何かが違うのだろうか。〈群れる〉あるいは〈集う〉ことは同時代の人々にとっていったいどのような意味をもっていたのか。そしてパブというものがそこにいかに介在していたのか。そのようなことに触れることなくしては、解き明かすことの難しい問題である。

さて、少なくとも調査という機会を除き、その場に足を踏み入れ労働者とじかに交わることはまずなかったであろう〈生活圏〉外の人々は、これをどのように解釈したのだろうか。そのような人々のなかでもたぶん例外であり、最良のイデオログのひとりケイは言う。

「私が話をした他の職人の人々は、胃と内臓の感覚が病的に刺激され、病気にかかっている。そのために腸の分泌が狂っており、食欲が損なわれている。この状態が続くと、患者はげっそりと痩せ、顔立ちは鋭くなり、血色が悪くなり、熱帯の気温の影響をこうむっている人々にみとれる黄疸色となる。力は衰え、肉体的に楽しむ能力は壊され、肉体の苦しみの発作は深い精神的憂鬱によって倍加される。ジンショップとタバーンという困窮と犯罪の棲み家によって誘われる、この病気の哀れな犠牲者は、日々の労働にまみれるにしたがい、きつい酒によって得られるまちがった刺激によって、苦しみを紛らわそうとするのも不思議でもなんでもない。あるいは倦怠そしてやすらぎのなさによってむさくるしい家庭から逃れるように駆られ、憔悴しきった職人たちはたえまない放蕩の夢にふけることで、先見の明のなさ、窮乏、飢餓そして途切れることのない苦役を思い出さないようにと努める。そうすることは弱くなっ

た肉体の残りのエネルギーを枯渇させる恐れのあるものだが、不思議でもなんでもない。(71)」

ケイの描きだす図はあたかもホガス描くところのジン横町のようなものである。過酷な労働による疲労を「まちがった刺激」であるきつい酒によって癒そうとする労働者たち、そしてその酒の世界に浸り、酔いのなかでしか夢見ることのできない安楽の世界に自らの身を委ねる労働者たち。帰るべき家庭にはたぶん彼らの心と体を癒してくれるものは何も待ってはいやしない。その狭くむさくるしい、光のない闇の世界である家庭からの、ささやかなひとときの逃避の場こそがパブであった。資本の浸透が緩やかな職場では、月のはじめや給料日後の4、5日を怠惰に暮らし、その損失を補い帳尻を合わせるために過長労働をする労働習慣があり、その緊張をやわらげるために「悪い仲間」がたむろするビア・ハウスへと労働者はひきつけられていく、とも指摘されている(72)。

「人間の欲望の限界を越えてあふれそして身を滅ぼすまで蕩尽する多くの労働者階級の浪費・放蕩……。経験ある工場監督官のトレメンヒーア(Hugh Tremeneheere)が意気消沈して言うには、『前の世代の半分野蛮人ともいうべきマナーは、ほとんど一般的な広がりを見せている酒に溺れること(sensuality)へと変わってしまった。』大酒を飲むことがもっともしばしば指摘される快楽であった。(73)」

こうして人々を泥沼へと引きずり込む、酒そして人の<集う>場のパブは最大級の形容をもって語られる。いわく「現在の巨大な害悪として大酒を飲むこと——犯罪と困窮の発生源——を非難するのにまったく躊躇はな

---

(71) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition*……, p.26.

(72) *MCCE*, 1839-40, pp.183, 185.

(73) *Report of the commission on the state of the population in mining districts, Parliamentary Papers*, 1850, xxiii, pp.578-587, quoted in Peter Bailey, *op. cit.*, p.36.

い。<sup>(74)</sup>」「同時に(この国の道徳的頹廢の)第二番目の原因は『快楽に溺れる(sensual)そして悪魔のような(devilish)』大酒のみ<sup>(75)</sup>』であるというように。

モラリストらはそれが生み出す恐怖をあおりたて、悪魔のごとく次のように叙述している。

「報告書によれば、……タバーンは下層階級の犯罪者と放蕩者の寄り集まる場所である。隠そうとすることのまったくない、そこに生じる墮落の光景——それらをはねつける力をまったくもたない、それらの社会階層にタバーンが恥知らずにも提供している道徳的墮落への絶え間のない誘惑の魔の手——怠け者や軽率な者を虜にする大きな罪へのそそのかし——タバーンに日々の隠れ家を見つけた悪漢によって、ここであからさまに教えられている不法なおしえ、不誠実な行為——……。必要なのだという見せかけをとり去り、高潔な楽しみというベールをめくれば、それは悪徳の学校(public school of vice)である。<sup>(76)</sup>」

「犯罪のすべての近因のなかで、飲酒、そして法律が許可している飲む場所と酒への誘惑——大衆の道徳と幸せにとってもっとも弊害のある——が原因となっているものほど恐ろしく強力なものはない。このことについてはなんら統計を必要としない。どの町もビアハウスとパブリックハウスが満ちあふれ、その多くが管理が悪く、町ではその幾軒かは泥棒、売春婦そしてばくち打ちの巣窟である。……若者をよびこむために売春婦を雇うことがそれらの場所では常態化している。この種の大部分は売春宿である。すなわちそこではあらゆる悪徳が育ま

---

(74) Evidence of Philanthropist, Alexander Thompson, quoted in Mary Carpenter, *op. cit.*, p.133.

(75) Evidence of Mr. Clay, quoted in Mary Carpenter, *op. cit.*, p.137.

(76) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition*……, p.59.

れ、——強盗が計画され、——不品行がほしいままにされ、墮落の巢に盗人がひそんでいる。賭博が一種の賞金によって最近奨励され、評判の悪い種類のインやパブリックハウスが最近法律の網の目をかいくぐって建てられ、そこに足しげく通う若い店員やぼんやりした者の身を滅ぼしている。(77)」

貧民や犯罪者がうじゃうじゃと寄り集まっている場所に、このようなジンショップ、タバーン、ビアハウスが最も多いことをモラリストはけっして疑わない。とすれば、貧困と酒にまつわる「墮落」、そして犯罪と酒との間の結びつきは明白とされる。法に触れるあらゆる行為——泥棒、売春、賭博など——の巣窟、温床となっているのがパブであり、そこに足しげく通う若者はこの好餌食となり、この社会への敵対者へと育てられていく、というわけである。ウィルダースピンも年少非行の最大の原因はパブである、と糾弾している。「サタンはエールハウスほど自らの榮譽がたたえられ、一生懸命崇められる寺院を持っていない。——どのような牧師といえども、その主人ほど一生懸命ではない——どのような信奉者といえども、そこに足しげく通う者ほど熱心ではない。(78)」

ところでなぜゆえ人々は<集う>のだろうか。そしてなぜゆえパブが人々を魅了したのだろうか。それはパブが労働者にさまざまな慰安を提供するとともに、社会的・経済的機能を果たしていたからである。パブは都市の貧民大衆にとって、ごみごみとした汚い街や狭いみすぼらしい家ではなかなか得ることのできない暖かき、光を提供した。だからそこは自然と人が集う場であり、人と人とは結びつく場でもあった。もちろんそこにはいつも酒があった。人が自然と寄り集まるゆえに、方向性を見失った新参者と不満を持った人々を惹きつけるものであった。「パブは職業紹介所、賃金の支払場所、そし

(77) Jelinger C. Symons, *op. cit.*, p.64.

(78) Samuel Wilderspin, *The Infant System*……, p.28.

て遍歴職人の寄港地として機能していた。……あるいはまた下宿している独身者にとってパブは家庭にもっとも近いものであり、彼はここで食事をとり、新聞を読むなどした。……またパブで会合を開いたクラブなどのうちで最も顕著なのは友愛協会である。<sup>(79)</sup>」ハンプシャーの牧師は1833年にある労働者について「ビアハウスは彼にとって魅力的なものでした。……ビールではなく、そこで出会う友人関係、彼らが交わす談話、それらのビアハウスにたえず持ち込まれ、読まれる、とるに足らない印刷物のゆえです<sup>(80)</sup>」と正確にも指摘している。民衆の読む印刷物や新聞がここを拠点として交換流布され、あるいはパブでは政治談義に花咲くこともあったことはよく知られてい

---

(79) Peter Bailey, *op. cit.*, pp.10-11.

学校教師に対する給与の支払いが以下のような方法でなされるのをどのように解釈したらよいのだろうか。この書き手はもちろん教育の提供者の視点から「あってはならないもの」として描いているのであるが、逆の視点からすれば「労働者階級私営学校」と推定されるこの学校は、教育の消費者たる親と共同体の一員たる教師との、きわめて親しい関係を基盤として運営されていた、とも言える。

「この学校の教師に対する給与支払いの方法は顕著で特徴的である。一種のクラブ、それは生徒の親以外の者をふくんでいるのだが、毎土曜の晩にパブリックハウスに集まる。その際に酒を飲んだりタバコを吸ったりして何時間か過ごした後、寄付が集められ、教師に手渡される。教師はその仲間の一人であり、そのお金の一部で寄付者に大いにご馳走することを期待される。」(G. R. Porter, 'Statistical Enquiries into the Social Condition of the Working Classes, and into the Means Provided for the Education of their Children', in *Central Society of Education, second publication of 1838*(rep.1968), p.254.)

友愛協会や相互扶助クラブの会合がパブで開かれ、そしてその基金が酒代に充てられることに関して、批判が向けられている。

「共済クラブ (benefit-club) へ所属する習慣はたいへん広範な広まりをみせている。通常毎月開かれるこれらのクラブの集まりでは、ひとりあたり2ペンスのお金がクラブの基金の中からビール代として使われるのが認められている。いちどに3分の1以上のメンバーが出席することはけっしてない。出席者は許された額、そしてしばしばそれ以上の額を使う。そしてこの習わしをやめさせる試みはいっときでも成功したということを知っていない。したがって気だての良い者は、……誘惑され、そして廻りの実例の力で暴飲の習慣へと溺れていきがちである。」(MCCE, 1839-40, p.186, See MCCE, 1840-41, pp.142, 207.)

(80) *Report from the Select Committee on the Sale of Beer, Parliamentary Papers*, 1833, xv, p.9 (evidence of Rev. Robert Wright of Itchin-Abbas), quoted in Robert W. Malcolmson, *op. cit.*, p.72.

る<sup>(81)</sup>。こうしてパブは仕事以外のもっとも日常的な集いの場であり、共同体の一種のネットワークセンターとして機能していた。

中産階級の視座から言えば、人が<集い><群れる>パブは、そこから集団的な力が産みだされる危険な場であった。<集う>ことによって労働者は<数>から生じる自信によってつき動かされるようになり、それを階級意識とはいえないにしても、集団的連帯感を育てることにもなった。したがって、支配の及ばない場での労働者の自律は、中産階級の拠って立つ基盤を脅かす力を孕んでいるものであり、それだけでも危険きわまりないものであった。

だから中産階級の論の方向性は、「墮落」防止策として法的規制を要求するばかりでなく、たとえば飲酒の害を防ぐためには、子どもたちに対して家計のやりくりを教え、衛生・健康教育を施す必要性をとらえるなど<sup>(82)</sup>、労働者階級の趣向、習慣の形成へというお決まりの主張へと収斂していく。このような道徳環境主義ともいべき言説を支えたものは、ひとつには酒に溺れることは聖域と考えられていた家族イメージとは並び立てなかったからである。家族へと引きこもり、その孤独を楽しむことに喜びを見いだしていた者にとって、依然として寄り集う<社交性>にしがみついていることは逸脱以外の何ものでもなかった<sup>(83)</sup>。だからそのひとつの予防策は、そのようなく群れる<集う>という人と人との関係を断ち切り、すべてを「炉辺のやすら

---

(81) たとえば急進的出版物は販売数よりもはるかに読者数が多いことが知られている。20倍以上に達すると言われている。それは作業所、パブ、コーヒールームなどで読まれたからである。労働者階級全国ユニオン(National Union of Working Classes)のメンバーは日曜の朝にベンボウのコーヒーショップで急進的新聞を読み、討論するために集まった。ラヴェットによれば、ひとりのパブの主人は労働者の顧客を確保するために、一週間に5ポンドを定期刊行物の代金として支払っていた。(Patricia Hollis, *The Pauper Press: A study in working-class radicalism of the 1830s*, Oxford University Press, 1970, p.119. See Joel H. Wiener, *The War of the Unstamped: The movement to repeal the British Newspaper Tax, 1830-1836*, Cornell University Press, 1969.)

(82) *MCCE*, 1840-41, p.170.

(83) アリエスの指摘するように「孤立することに幸福を見いだす」近代家族は18世紀以後、「社会とのあいだに距離をもち始め、絶え間なく拡大していく個人生活



ぎ」へと、そして家庭という聖域のなかへと囲い込むことであった。猥雑な公的な世界から遮断された私的世界たる家庭は、俗界からの避難場所であった。労働者階級には閉じることによる充足感を感じる私的世界たる家庭が欠落していた、とみなしていた中産階級の急務は、その代替を彼らにあてがってやることであった。それが家庭を範とした学校であり、父母を範とした男女教師であった。この点についてはのちに論ずることにする。

「793. 労働者はその時間のほとんどをその家族とではなくタヴァーンやパブリックハウスで過ごしましたか？ ——晩にパブリックハウスパーラーに行くことは、そう呼ばれていた慎重な職人のほとんど一般的な習慣でありました。そしてほとんどがそこで食事をしました。それらのハウスの多くでは富くじクラブやパンチクラブがありました。そのような習慣はそのほとんどのメンバーの破滅のもとでした。……

795. 家庭での時間の使い方に関しては、労働者の娯楽は洗練されましたか？ ——家庭では理性的な娯楽はありません。男たちはカード遊びや酒盛りがない限り、晩には家におりません。彼らはその時間をまったく無駄に、それもほとんど有害な方法で過ごしています。<sup>(84)</sup>」

プレース自身は中産階級の出身ではないにしても、この証言は家族へと引きこもる者たちの視座からの証言である。いわば脚色された証言である。

稼いだ金をパブやビア・ショップで浪費してしまう飲酒癖は、当然のことながら、聖域である家族の「やすらぎ」とは相いれないものであり、その結果下される罰は、そのような人々を社会の下層、貧困のどん底へとつき落としてしまうものである、との図式は既に見たとおりである。あるいは描かれ

---

の枠外に社会を押し出すようになる。」(フィリップ・アリエス、杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』みすず書房、1980、378頁。)

(84) *Report 1835, evidence of Francis Place.*

る最悪のものは家庭崩壊の図である。

「父親があらゆる義務の原則そして人間性に無頓着になってしまい、賃金を受け取るやいなや、飲みに出かけてしまい、妻と子どもたちは家で飢えたままで放っておかれる、そういう父親の子どもも学校にはたくさんいる。父親は家に帰ってくると、妻と子どもたちを罵り、叩く。飲み友達と楽しくやれるならば、子どもたちが罵り、嘘をつきそして盗みをしたかどうかにいっさい関心を示さない、そういう多くの事例を私は知っている。とくに私の知っている一つの家族では、7人の子どもたちがおり、うち2人は学校に通っており、4人は母親の努力で養われており、彼女が言うには一カ月に一シリングも父親から受け取っていない。父親が稼いだお金は自分自身で使い、家族は飢え死にしそうである。<sup>(85)</sup>」

実際これらのことがまったく事実として生じなかったとは言えないし、さまざまな理由で家庭において父親が不在であることもまたあったであろう。さらには親による子どもの虐待には、大酒を飲むことが絡んでいる場合も多かったかもしれない。しかし、それがどの程度の広がりを見せていたかはわからないし、このように敷衍することは必ずしも正しくはない。中産階級の書き手は、飲酒の程度とその影響をあまりに極端な事例を強調することによって、そしてあたかもそれらが一般的であるかのように装うことによって、度外れに誇張する傾向にあった。それは意識的にせよ、無意識にせよ、彼らの先入観のなせるわざであり、彼らの教育戦略にとっての前提でもあった。

\*

\*

貧民大衆の「手に負えない」「野蛮な」「官能的満足を追い求める」振る舞いに対する、社会改革者の敵意・敵愾心は、一部は福音主義的精神によって

---

(85) Samuel Wilderspin, *On the Importance of Educating*……, pp.87-88.

鼓舞されたものであり、それらの中産階級的なキャンペーンは、祝祭、酒、動物虐待、パブなどその餌食にはこと欠かなかった。もはや19世紀のこの時期には、日常生活のなかではめをはずす慣行を擁護する者は中産階級の間では見いだせなかった。というのも、既に述べたように、この放恣を許す慣行が、社会秩序統制の現行機構が支配を及ぼすことのできる、あるいは許容できる範囲を抜けでてしまい、秩序を揺るがす緊張を生み出す危険性があったからである。このことの背景にはかつて階級間の社会的交換を特徴づけたものが機能しなくなってしまうということがある。教会、貴族そしてジェントリーによって樹立された伝統的ともいえるべき社会的架け橋はさまざまな理由から廃れかかっていた<sup>(86)</sup>。他方、時代の寵児たる中産階級の雇用主あるいは専門職の人々は、労働者と交わる習慣を持ちえなかった。トムスンが分析したように、彼らは18世紀の高位の者やスクワイアの社会スタイルをなにも身につけていなかった<sup>(87)</sup>。下院の委員会がいみじくも述べているように「イギリス人の重要な実際教育は職場での親方と職人とのあいだの絶えまない交流から学んできたものである。<sup>(88)</sup>」しかし非人格化への傾きを強める作業所、工場での経験はたいへん抽象的・限定的なものであり、かつてのように階級間に共通する〈社交性〉を生み出すことはできなかった。

---

(86) 囲い込みによる場の喪失、社会関係の変化、市場経済の確立による思考・行動の変化などが慣習的行動の衰退要因として挙げられよう。「慣習は小さな、緊密に織り合わされた共同体のしるしであり、それはより大きな、より流動的な、そしてより非人格的世界でその力を失いつつあった。すなわち、ここでは明瞭なそして厳格な世論のインパクトがかなり減じつつあり、自由市場が伝統的習慣の力を弱体化させている。一層多様化したそして匿名の都市世界では、概して、慣習を押しつける可能性はほとんどないし、実際には労働者の選択の範囲はかなり制限されてはいたが、自由な選択をおこなう可能性がより増えた。『近代化』の過程の中で、慣習的行動は痛めつけられた。」(Robert W. Malcolmson, *op. cit.*, pp.116-117.)

(87) (88) E. P. Thompson, 'Patrician society, plebeian culture', *Journal of Social History*, vii, 1974, pp.382-405.

<集う>ことそしてそれに伴う放恣の社会的意味は、それらが根づいている社会的関係や規範の複雑さを理解しない限り、解きあかせないであろう。意外でもなんでもないが、さまざまな社会改革者たちの間で基本的に欠落していたのは、労働者階級の生活様式をすくいとる視座である。彼らは労働者階級の日々の暮らしの実態をなにも知らなかった。知らなかった、という言い方はいささか不適切かもしれない。確かにわれわれの問題としているこの時代は、さまざまな社会調査が試みられた時代であった。だから労働者階級の生活の諸相が浮かび上がってきたのかもしれない。浮かび上がったものが<事実>かどうかは問題であるが、調査がそれらを浮かび上がらせた、といった方が適切であろう。視学官は記している。

「大人たちの間では暴力犯罪そして酔っぱらいが減少したかもしれないが、あらゆる種類の年少非行は、一般的な意見によれば、かなり増加している。無作法、長上の者に対する尊敬心の欠如、不服従の精神は顕著にふえているといわれている。迷信そしてたいへんな軽信が存在することが当然ながら想像できるであろう。こっちにはその魔力によって危害を加える力で廻りの者をおそれさす魔法使いがおり、あちらには超自然の外見で、星の知識ですべての病気を治すにせ医者がある。海沿いの町では、大きな魚の尾とはりぼての胴体からなる『怪物』、それは明らかに詰めものをして縫い合わされているのだが、それを一目見ようとお金を払って群衆が集まってきた。<sup>(89)</sup>」

「マンチェスターのあるひとりの牧師が私に言うには、彼の教区では数百人の男たちが妻を共有している！ ランカシャーのほかの地区では中産階級や労働者階級のあいだに、パンフレットが広範囲にばらまかれている。それは結婚の神聖さを否定し、結婚を勝手な身を持ち崩すような

(89) MCCE, 1840-41, pp.453.

制度のうえに置き、そして次にはほんとうに呪わしい、想像することもできない悪意でもって、ダビデ王の真のことばでは『神からやってきた遺産、賜物』である、生命はあるが生まれていない胎児を殺すことによって、そのような制度がいかに簡単になるかということを説いている。それらの地域ではまったく教会に行かない我々の同国人が何千、何万といえるのは周知のことである。大部分の者は祈りのことばを一言も発しないし、その気もさらさらないのはまったく見上げたものである。多くの者は日曜はほとんどベッドで過ごす。ダラムやノーザンバランドの鉱山地区では、炭坑町の安息日はキリスト教の国での奇妙な光景である。そこにはしばしば教会がない。安息日は卑俗なそして騒がしい楽しみの日であり、男たちはぶらぶらその辺を歩き回り、ある者は仕事着ではない普段着、ある者はもっとスマートに着飾っている<sup>(90)</sup>。」

労働者の〈生活圏〉への領域侵犯者、その表層にしか立ち入れない観察者にとっては、労働者の世界は彼らの認識の枠組みではおしはかることのできない異様な世界と映ったはずである。だから彼らとその眼で見、書いたことは、〈事実〉というよりも、それに対する彼らの構えの表白であった。たとえば、晩婚化傾向を示していた当時の中産階級の基準からすれば、労働者階級のライフサイクルはかなりな違和感を与えたにちがいない。視学官のトレメンヒアは炭坑地域の教育報告書のなかで、成人の賃金は約18歳から得られる一方、自活の経費は賃金の半分にしかすぎず、この結果、結婚資金が充分なくとも結婚することができるので、安定性を欠いた結婚生活が始まるのであり、また子どもが18、19歳までは子どもの賃金は親の所得となるので、子どもをつくって働かそうとする考えが早婚を助長している、と批判めいた口調で、炭坑夫の早婚傾向について記している<sup>(91)</sup>。

---

(90) *MCCE*, 1845, Vol.2, pp.160-161.

(91) *MCCE*, 1840-41, p.201, See *MCCE*, 1846, Vol.2, p.26.

また他方では、未婚生活も槍玉に挙げられる。

「下層階級のすべての未婚生活はたいへん危険で厄介なものである。彼らは結婚して落ち着いたにしても、おおくの誘惑にさらされている。さまざまな教区での経験から、性格の良い(下層階級の)中年独身男はまったくいないと断言できる。彼らは適切にも『気違いじみた奴ら(wildish chaps)』と名付けられていた。彼らは比較的若い年齢で、家庭、学校、そして教区のすべての落ち着いた影響から自由となる。彼らは絆も義務も持っていないように見える。彼らがたとえ遠い場所へ行ったにしても、なんらかの監視をすることが、この状態から私たちの子どもたちを救う道である。<sup>(92)</sup>」

本当はこれらの事象がどのような理由によって生じているのか、ということへと問題は投げかえされるべきなのかもしれない。はぐらかすわけではないが、ここでは中産階級がそういう現象へと眼がひきつけられ、そしてある視角から見ることを強いられている、ということがわかればそれで充分である。ただし、それらの振る舞いの背後には必ず貧しさの影がちらついている。でも貧しさの一言ですべて理解できたわけでもない。貧しさにもかかわらず、労働者は質素に暮らしているわけではないことに、中産階級の人々の眼は吸い寄せられてしまう。たとえばパブでおごりあって有り金をパーっと使ってしまう。あるいは一方では質屋に高い金利を払っているにもかかわらず、金を酒につぎ込んでしまっている。労働者階級のそういう生活様式もまったく中産階級の理解の範囲を越えてしまっている。それは儉約という考えがないことへの非難でもあり、ひいては生活設計のなさへの告発でもあった。貯蓄意欲の高い中産階級にとって、事実を覆っているベールをはがすことは一

---

(92) MCCE, 1844, Vol.2, p.267.

筋縄ではなかった。いやそもそも事象にたいする意味づけをすることは不可能であった。だから当惑して述べている。

「救貧法の適用を受けるほどの貧しさ (pauperism) の縁にいる幾人かの者は、借りた少額の金のために質屋に多額の利子を支払っている。そして多くの者はうまく使えば家での暮らしむきをよくするにもかかわらず、多額のお金を健康を害するビールあるいは強い酒に浪費している。

このような類の事実を知るようになると、子どもたちはきつい酒を飲み、借金をする愚かさに幼いときに気がつく。そしてジンショップに通うかわりに貯蓄銀行あるいは儉約協会 (provident society) へと導かれるであろう。そして生計費が減り、物質的やすらぎが増すさまざまな工夫を学ぶこととなる。<sup>(93)</sup>」

---

(93) *MCCE*, 1840-41, pp.170-171.

ハドソンによれば 1830 年代には、アイルランドを除くイギリス全域で、1537 軒の公認の質屋があった。そして質屋は「伯父貴」の仇名でよばれていたという。「『伯父貴』こそは『おい』や『めい』が困ったときに、いつでも助言と融資を求めることのできる、ごく親しい隣人であり、弱ったとき、困窮したときによりかかることのできる、頼もしい大黒柱であった。したがって、競争と完全雇傭、割賦販売の普及、福祉国家の成立などといった社会的諸条件がいわばグルになって、かつての恩も忘れていささかすげなく質屋を社会の背景に押しやってしまう以前には、それは労働者階級の経済にとってはまさに決定的な意味をもっていたのである。」(ケネス・ハドソン、北川信也訳『質屋の世界』リプロポート、1985、15-16、72 頁。)

質屋通いを教育とかかわらせてウィルダースピンは論じている。

「貧民の間に広まっており、人々が一般に考えているよりも害悪を及ぼす習慣について述べてみよう。すなわち子どもたちを質屋へと使いに出すことである。いくら厳しく責められても致しかたのないことであるが、多くの人々はまだ 7 歳にもならない子どもたちを、質草の品物をもたせて質屋に使いに出すことがよく知られている。私が知っている実例では、小さな少年が路でショールを拾ったが、母親に言いつけられて質屋に行くことがたびたびあったので、そのショールを両親のところに持ち帰るのではなく、それを質にいれ、そのお金を全部使ってしまった。母親が子どものポケットから質札を見つけることがなかったならば、そのことは親に露見することはなかったであろう。したがって明白なことは、自分の子どもの非行について多くの親たちは自分自身以外に責める人がいないとい

「貯金をする動機のなかでもっとも一般的なのは……家を建てるということである。実際建てられたり、建築中である戸数はたいした数ではない。抵当をとって金を貸すあるいは職についている人にそうすることは一般的ではない。少額の貯金は窮境のときには現金に換えられる時計やマホガニーのタンスのような、高価な家具に使われているように見える。<sup>(94)</sup>」

このような生活様式が労働者階級の間で一般化していたかどうかはわからない。だが、すくなくともこのような現象に書き手の眼がひきつけられてしまっているのは、彼らと労働者との間にはかなりな生活様式のちがいがあったということである。ちがうからこそ、眼がいつてしまうのである。ここでは労働者階級は儉約という観念が欠如している、という非難にさらされているが、そういう非難の妥当性はきわめてあやしいものである。その日暮らしとはいわないまでも、せいぜい一週間という程度の見通しでしか暮らせなかった人たちがいたのであり、彼らが好んでそうしていたかどうかは問題ではない。それが彼らの暮らしであり、彼らの生活様式であった。それを観て矯正したいとうずうずしていた人々とはまるでちがったスタイルがここにはあったのである。

生活様式の差異を考慮するならば、ライフサイクルのなかでしばしば危機的状況に陥る潜在的可能性にさらされていた労働者にとっては、人ともものに

---

うことである。というのもこの子どもが親のために質屋にゆくことに慣れていなかったならば、自分自身でそこへ行くことはけっして考えなかったであろう。そしてショールは子どもがそうすべきであったように、親のもとに持ってこられたであろう。そのようなシステムがどこで終止符を打つかはまったくわからない。というのは子どもたちが質屋に行く経験をするならば、彼らはやがて自分の物ではない物を質入れするようになる。これはどのような品物でもお金にかえるたいへん簡単な方法であるので、男女両方の若い盗人を捕まえたときには数枚の質札を持っていることがある。」(Samuel Wilderspin, *On the Importance of Educating*……, pp.190-191, See *The Infant System*……, pp.39-40.)

(94) *MCCE*, 1839-40, pp.187.



対する意味あいには中産階級のそれとは異にしていたはずである。現代のように社会福祉制度が整備されていない歴史段階では、労働者は危機的状況——結婚、子どもの誕生、病気、失業、老齡、死——にさらされていた。だからこの危機的状況の打撃を少しでもやわらげ、経済的不安そして精神的不安を解消するためには、自分の廻りに頼みとする人そしてものが必要であった。もう少し言うならば、ブルジョア的徳である「儉約」の代わりとなる人と人との結びつきが労働者階級にはあったのである。危機的状況に直面した場合にも、お上の世話になるのをよしとせず、「この階級に特徴的である独立心、そして救貧税に頼ることをよしとしない気風<sup>(95)</sup>」が労働者のあいだにはあった。そして労働者の相互扶助は明確な制度的形態をとっていないにしても、「貧困や不況の場合はより一層の情け深い同情が示される。すなわち寄付がすぐに彼らの間で募られ、食糧あるいは必要なところでは家事をするという形で援助がなされる<sup>(96)</sup>」のであった。このことをとりたててロマンチックに解釈する必要はないが、生活のさまざまな場面で労働者は人と人との結びつきに頼ることができたのである。もしそれが「前近代的」な人と人との結びつきであり、それに代わるものが出現していないと言うならば、人に頼らざるを得なかった、と言ったほうが正しいかもしれない<sup>(97)</sup>。

ともあれ、「前近代的」とも言える〈群れる〉〈集う〉ことは、人と人との関係をより濃密にしたであろうし、このような心性・慣行は彼らの生活様式にかなり浸透していたことは見てきた通りである。

\*

\*

労働者〈生活圏〉になかなか入り込めなかった中産階級の人々の証言、言説は次のことを露出している。労働者の日々の暮らしは彼らの尺度では了解不能な異質な世界であり、さまざまな「異常性」を前にして怯んでいた。し

---

(95) *MCCE*, 1840-41, p.208.

(96) *MCCE*, 1840-41, p.211.

(97) Michael Anderson, *op. cit.*, pp.160-161.

かし立ちすくんでいるだけではもはやすまないことも明らかであった。多くの中産階級のイデオログは、それはまちがいであると労働者を説き伏せ、矯正したくてうずうずしていた。彼らのとる構えは共通している。階級間の距離を強調することによって、中産階級の公認価値のなかへと労働者を誘い込み、ひいては理性的生活様式への変容を推進する、というきわめて教訓ぶつたものへとなだれ込んでくる。すなわち、すべてのものを「教育」「学校」という言説へと投げ込み、そこへとなだれ込んでいった。

「あらゆるイギリス人を小さいときから教育しないかぎり、将来の保証は得られない。危険な階級(the dangerous classes)は急速に増加している——すなわち盗人や売春婦が増えている。労働者の大部分は不信心である——国の宗教と政府をけなす扇動者たちが国中に幅をきかせている。ホーリオーク(Holyoake)、レノルズ(Reynolds)、クーパー(Cooper)らの著作を読んでみなさい——ジョンストリートやその他の場所での集会に行ってみなさい。地方を廻っているこれらの人々によってなされている演説、報告を読んでみなさい。……他方、牛がかかった病気を魔力でもって退治した賢い女性について、農業地域の労働者が話しているのを聞いてみなさい。1838年のケントでの暴動をおもいだしてほしい。そこではにせの COURTNEY (Courtney) がたいへん顕著な働きをしたし、人々は彼が新しいメシアだと信じていた。生まれたすべての子どもたちは誕生から6年間の間教育されるべきだ、とどうしてあなたがたは信じないのか。教育の一般的システムのみが害悪に應じることができ、私たちを最大の危険から救うことができる。(98)」

「物質的害悪に対する勝利をもたらすものは、精神を改善し、階級の道徳的性格を向上させることのうちにある。……各々が他のものと協働する。しかし精神的、道徳的そして宗教的機関からその力を引き出す形態は計算できな

(98) The Rev. T. Beames, 'Education as it is, and as it ought to be', in Viscount Ingestre (ed.), *Meliora*……second series, p.78.

いほど強力である。したがって、社会が進歩するのは教育と宗教のおかげである。<sup>(99)</sup>」

こうしてすべての社会問題の万能薬として、道徳環境主義ともいうべきものがその顔を出す。ケイが言うように、「貧民が苦しんでいるすべての害悪はもっぱら貧民の無知と道徳的偏向に帰す」というほど単純なものではない。そうではなく「彼ら自身の習慣から直接に生じるものさえも、貧民の性格に社会の不完全な機関が与える第一の影響へと——教化されない無知の複合的影響——道徳教育の制度によって打破されない悪い実例——飢えと労苦と戦っている邪道に陥った精神の窮境にまでへと辿ることができる<sup>(100)</sup>」のである。だがそれらも〈道徳〉である。既に述べてきたように、さまざまな環境も〈道徳〉という名のもとに含み込まれてしまうのである。とすれば、ヴィクトリア朝初期の社会改革者にとっては、フォーマルな学校教育が唯一の処方箋——労働者階級はその地位にふさわしい道徳的、宗教的義務を身につけ、社会秩序内にその席を占めることとなる——であったこともうなずけよう。

しかしなぜゆえこのような道徳環境主義が時代を席卷したのだろうか？そのことをもう少し追わなければならないだろう。

---

(99) James Kay-Shuttleworth, *Sketch of the Progress of Manchester in thirty years, from 1832 to 1862*, in *Four Periods of Public Education*, 1862 (rep. 1973), p.148.

(100) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition.....*, p.6.